

京都会津会法要後の会食の席に、お弁当とは別に山盛りの「ニシンの山椒漬け」が出された。同行の女性会員 k さんが小皿に分けてくれた。食するのは久しぶりである。肉厚、柔らかさとも最上のニシンに山椒の若芽の香りがほどよく浸み込み、口いっぱいにうまみが広がった。まことに美味である。法要に参加された会津若松の造り酒屋ご当主お二人が自慢のお酒を持参され、ふるまわれた。輝く庭の緑を目にし、芳香に包まれたニシンを肴に会津の銘酒を飲み比べるのは至福のひとつときであった。会津の伝統料理が京都で息づいているのだろうか。どなたが作られたのでしょうか。

京都会津会主催になる會津藩殉難者追悼法要に参列したのは初めてである。「みやぎ会津会」の例会の一つとして計画、須佐会長以下 20 名が参加した。黒谷金戒光明寺の高麗門には、右に寺号「大本山金戒光明寺」、左に「奥羽会津藩松平肥後守様京都守護職本陣舊蹟」と記された大きな白木の案内が掲げられ、門前には「会津藩殉難者墓所」の石塔が建立されている。会津が大切にされていることがうかがえる。境内に入っても切れ目なく「会津墓地参道」の案内が続く。案内の石塔には「昭和三十三年七月」と刻まれている。数えれば戊辰の役から 90 年目の年にあたる。節目の年に関係者が整備されたのであろう。

やや長い上り坂の参道を登りきると、法要が執り行われる塔頭西雲院の真新しい山門に突き当たり、手前を右に折れば一段高く会津墓地の墓域が広がっていた。

前日に発売された雑誌「歴史街道」は「八重と会津戦争」を総力特集している。その中に「昭和 3 年京都会津会秋季例会記念集合写真」が大きく紹介されていた。明治から昭和を代表する会津人である松平保男、松平恒雄、山川健次郎、柴五郎らの各氏が中央に、八重さんも前列に並んでいる貴重な記録である。中央後ろにやや広幅の石碑が写っている。現地で探してみるとそれは「鳥羽伏見戦の慰霊碑」であった。鳥羽伏見の戦いで戦死した八重さんの弟山本三郎の名前も刻まれていた。明治 40 年 3 月建立とある。今年の法要は第 108 回という。このまま差し引けば明治 38 年が第 1 回で、碑は 2 年後の建立となる。権勢を極めた薩長藩閥の明治の治世にあって、「会津藩殉難者」の言葉を用い、慰霊法要の執行と碑の建立を成し遂げられた先人の偉業に深い感銘を覚えた。

寺域の頂き付近に位置する墓所に額づくうちに、一つの墓を思い起こした。仙台北山に伊達家ゆかりの名刹輪王寺がある。ここの山頂付近に、飯盛山で自刃するも蘇生し、逋信省技師を歴任後仙台で没した会津藩白虎隊士飯沼貞吉（後「貞雄」と改名）の墓がある。生前白虎隊については多くを語らなかったと伝えられるが、歴史の証人であった人物である。母文子は出陣に際し「梓弓むかう矢先はしげくともひきなかえしそ武士（もののふ）の道」を短冊にしたためたという。墓誌には白虎隊として出陣した経過について刻されている。なぜ輪王寺に墓所を定めたのかは不明であるが、京都、仙台と会津から遠く離れた名刹の北東山頂付近に戊辰戦争に係る会津藩士の墓所が存することに不思議を感じた。

駐屯した金戒光明寺で千名の会津藩士はどのような生活を送ったのだろうか。激動の幕末京都の治安維持に身と心をすり減らしつつも都の生活を楽しむ余裕はあったのだろうか。ニシンそばが今日でも京都名物となっている。身欠きニシンは北前船で京都に大量に運びこまれていたに違いない。それを山椒漬けにするのに、ニシン鉢は会津から持参したのだろうか。

京都会津会主催の会津藩殉難者追悼法要に会津若松市の市長、議会議長、商工会議所会頭も参列して金戒光明寺で営まれていることは、京都守護職に起因する京と会津の結びつきの今日の一面であり、今後とも様々な交流を続けていって欲しいと願う。一方、ニシンの山椒漬けが京都で食されているのは、数少ない文化的結びつきであり、是非とも後世に伝え広めていただきたいものである。